

中等  
教科  
明治女大學

卷の三

K230.1  
13a  
3

K230.1

13a

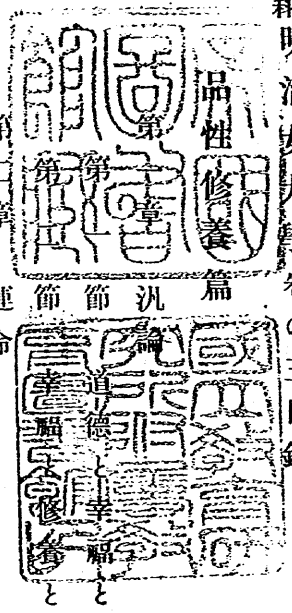
3

文學博士 男爵加藤弘之中島徳藏合著  
 法學博士

中等  
**明治女大學**  
 教科

東京 大日本圖書株式會社

中等明治女大學卷の三日録



第二章 運命

第一節 運命と幸福と

第二節 運命と勉強と

第三章 身體・外貌

第一節 體質

第二節 容貌

第三節 生命

明治 40 2 9  
 七 六 六 五 四 三 二 一

中等明治女大學 卷の三日録 大日本圖書株式會社

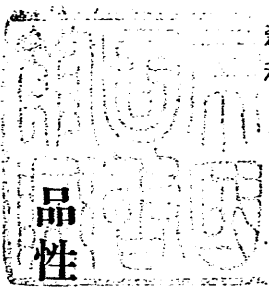
第八節	修飾	八
第九節	修飾上の心得	十
第四章	富	十一
第十節	富の意義	十一
第十一節	奢侈と吝嗇と	十二
第十二節	節儉貯蓄	十四
第十三節	善散・授受・貸借	十五
第十四節	富と幸福と	十七
第十五節	女子の業務	十八
第五章	名譽	十九
第十六節	名譽	十九
第十七節	令名心	二十
第十八節	自重と恭敬と	二十一

第十九節	令名心を養ふ方法	二十三
第二十節	信用	二十四
第六章	智識・才能・藝術	二十五
第二十一節	智識・才能(一)	二十五
第二十二節	同(二)	二十六
第二十三節	藝術	二十七
第二十四節	趣味	二十八
第七章	情操・品性・信仰	二十九
第二十五節	情操	二十九
第二十六節	克己	三十一
第二十七節	自足	三十二
第二十八節	立志	三十三
第二十九節	品性	三十四

第三十節 信仰

中等 教科 明治女大學 卷の三

加藤 弘之  
中島 徳藏 合著



品性修養篇

第一章 汎論

第一節 道徳と幸福と

幸福は知り難し  
人は此の世に生れて、何を求めんとするやと問はば、多くの人、我れは幸福を求むと答ふるなるべし。されど、幸福とは、抑も、何を云ふや、如何にして、之

れを求め得るやと反問せば、之れに明答し得る者は、蓋し、少なかるべし。或る人は、道徳てふものは、唯だ、社會國家の利益の爲、必要にして、我が一身の幸福の爲には、必要なしと信ずるが如し。然れども、是れ、大いなる誤なり。國家亂れて政令行はれず、人人得手勝手に、振舞はんか、一般世人は、勿論、知己朋友の間と雖も、相信すること能はず、隨ひて、安んじて、業務に従ふこと能はず、家族團樂の樂をなすこと能はず、唯だ、戰戰兢兢として、其の日を送るより外、致し方なかるべし。人若し、斯かる時世に逢はば、他

獻身的行爲  
と一身の幸  
福との一致

に、如何なる珍寶を有すとも、何等の樂とならざるは明かなり、斯くて、社會國家の利益は、やがて、我が一身の幸福となり、社會國家の利益を進むる道徳は、同時に、一身の幸福を進むることとなるなり。勿論、道徳は、獻身的行爲を命令することなきにあらず、社會國家が危急に際せる場合の如き、即ち、是れなり。されど、斯かる非常の事變に當りては、人は、時宜により、喜んで、生命をも棄てんとするものなり。況んや、財産快樂の如きものをや。達人より見れば、獻身的行爲も、亦た、精神上の幸福に外ならず。道

徳と一身の幸福と一致する所以の理、愈愈明かなりと云ふべし。

### 第二節 幸福と修養と

不幸福の本

己れ、幸福の中に居りながら、其の幸福たることを感ぜず、却つて、不幸を啣ち、或は、暫時にして、恐るべき禍の襲ひ來たるをも知らず、悠悠として、楽しむものあり。是れ、幸福の眞意義を知らず、又た、之れを得る方法を知らざるによる。

品性修養とは何ぞや

前節にも述べたるが如く、社會國家の爲に盡すことは、一身の幸福の根本なれども、未だ、之れを以て、

十分なりとはなし難し。有形無形種種の方面より、之れを得る所以の道を研究して、始めて、圓滿なる幸福を得べきなり。運命名譽身體財産智識才能趣味情操等は、幸福に關係する所、極めて、多し。此れ等件件に就いて、正しき心得を有し、又た、よく、之れを實行するときは、次第に、善良なる品性を養ひ得て、幸福なる生涯を送り得るに至るなり。其の詳細は、次章以下を見て、之れを知るべし。

### 第二章 運命

#### 第三節 運命と幸福と

運命は諦む  
る外なし

善事をなせば善報あり、悪事をなせば悪報あるは、人間社會の常則なり。然れども、世には、又た、人力の及ばざる運命てふものの存することを忘るべからず。體質容貌、天性及び親讓りの門地、資産等は、我れ等の禍福に大關係あれども、其の多くは、我れ等が、生前より稟け來たりしものにして、我れ等がなしたる善事、悪事の報と見るべからず。天變地異、其の他、不時の出來事等も、殆んど、人智の及ばざる場合に生ずるものなれば、是れ、亦た、善報、悪報と考へ難し。隨ひて、人力にては、之れを如何ともすること

運命は眞の  
幸福不幸福  
にあらず

能はず。其の好きに運り合ひたるは好運にして、悪しきに運り合ひたるは不運なりと諦むるより外、致し方なきなり。

然らば、運命其のままが、直ちに、其の人の幸福不幸福なるかと云ふに、是れ、亦た、然らず。畢竟、運命てふものは、多くは、之れを受けたる人の利用と否とによりて、禍福何れともなし得るものにして、全く、運命の命ずるままに、服従せざるべからざる場合は、寧ろ、甚だ、稀なり。例へば、好運も、之れを利用すること能はざる人にありては、却つて、之れに酔ひ、之れ

に毒せられて、零落の基となり、不運も、之れを利用する人にありては、奮發、勉勵の良藥となるが如し。諺にも、「好運の爲に零落するものは多し」と雖も、不運の爲に零落するものは少なし」といへり。好運、必ずしも、喜ぶに足らず、不運、必ずしも、悲むに足らざるの理、明白なりといふべし。

#### 第四節 運命と勉強と

運命は、之れを利用すると否とによりて、幸福とも不幸福ともなること、前節説く所の如し。然らば、我れ等は、如何にして、運命を利用すべきか。是れ、重大

運命利用法  
は一大問題  
なり

なる問題なり。

西洋の諺に、「好運は、常に、汝に隨はんことを求むれども、汝は、無情にして、常に、好運に背き去る」といへり。其の意、蓋し、人は好運に接する機會少なからずと雖も、才徳乏しきときは、之れを捉ふること能はず、空しく、機會を逸し去るといふことなるべし。之れに反して、才徳ある人にありては、不運も、之れを避け得る場合、決して、少なしとせず。されば、人、幼少の時より、怠らず、勉強して、其の才徳を修養すること、は、運命利用法の第一歩と云ふべきなり。

才徳修養は  
運命利用法  
の第一歩な  
り



運命は才徳と勉強とに敵すること能はず

既に、才徳を養ひ得たらんには、急かす、迫らず、倦まず、撓まず、全力を擧げて業務を勉強すべし。好運を捉へ得て逃さざるは勿論、之れを利用して一層の幸福となし得べく、又た、偶避くること能はざる不運に逢ふとも、直ちに、其の不幸を回復し、なほ、進んで、大成功を收むること難からず。實に、才徳と勉強とに對しては、運命の力も、殆んど、敵すること能はざるなり。天は、自ら助くるものを助く」とは、蓋し、之れを云ふなるべし。

### 第三章 身體外貌

#### 第五節 體質

體質弱きも利用の道あり

體質弱しとして、失望し、歎き悲しむは、却つて、自ら、不幸に陥る道理なり。病氣も、よく、之れを利用すれば、亦た、我が修養の機會となることなきにあらず。肺病者が大實業家となり、癩病者が大慈善家となりたるなどは、暫らく、例外と見んも、病室中の悟より、發明をなし、事業を計畫し、品性を練り、或は、少なくとも、世の病苦のものに對する同情を高め、或は、自己の衛生法を究めて、長壽の基を開きし等は、其の例、極めて多し。況んや、尋常の弱質をや。其の平生の

健康の幸福

用意により、よく健康者に劣らぬ幸福をうけ、又た、世用をも足し得べきは、少しも疑を容れず。之れに反し、健康の幸福は、多くは、自ら感ぜざるものなり。然れども、斯く、自ら感ぜざるは、我が身體諸部の無病健全にして、恩惠多き證據なり。此の恩惠を受くるものは、世の病苦になやめる者と比較して、其の至幸の人たるを知るべきなり。

第六節 容貌

美醜に伴ふ得失

容貌の美しきは好く、醜きは悪しきこと勿論なり。されど、美人は、往往、氣驕り心緩みて、却つて、人間高

我が美醜を氣に留むる勿れ

尚の徳を失ふに至るものなきにあらず。慢氣は美を損ふ、慎しむべし。之れに反して、醜女には、從順謙遜勤勉等、種種の才徳生じ易き傾あり。若し、一旦、内に才徳を積まんに、其の功、自ら、精神美となりて外に現はれ、よく、自然美の缺點を補うて、餘あるに至るべし。

我が美醜は、深く、氣に留めざるをよしとす。太上は之れあるを知らず」と云ひ、又た、深山寶あり、寶に心なき者之れを得」と云へるは、之れを云ふなり。美は美を忘れて、更に、美に、醜は醜を忘れて、人復た、之れ

美醜を氣に  
留めざる法

を醜とせず。他人の美を美とするは、敬愛の道にして、爲さざるべからず。我が美醜に心あるは、慢氣若しくは、僻ヒキを起す所以にして、常に宜しからず。されば、我が美醜、二つながら、氣に留めざるは、是れ、容貌に就いて、幸福なる道なり。

我が美醜を氣に留めざるの法は、他なし、唯だ、一心に、自己の業務を勵むにあるのみ。

### 第七節 生命

生命の貴重

『生命あつての物種』とかや。生命の、我が幸福に取りて、貴重なるは、云ふ迄もなし。

生命よりも  
貴重なもの  
あり

されど、生命の貴重なる所以は、單に、他の動物の如く生くる爲にあらずして、萬物の靈長として生くるが爲なり。もし、斯くの如くにして生くること能はざれば、寧ろ、死するを以て幸福とすることあり。故に、曰ふ、欲する所、生より甚だしきものあり。惡む所、死より甚だしきものあり。獨り、賢者、是の心有るのみに非ず、人、皆、之れあり。賢者、能く、喪ふことなきのみ」と。

輕輕に自殺  
すべきに非  
ず

生命は棄つべき時ありと雖も、是れ、變時のことなり。平常、輕輕に、之れを棄つるが如きは、愚痴の所業

にして、亦た、社會國家の罪人なり。思ふに、我が身は、祖先の遺體にして、父母社會の恩によりて、始めて、此所に人となれり。されば、我が生命は、我が物にして、我が物にあらず。私利私情の爲に、生命を棄つるが加きは、卑怯とも我が儘とも云はんやうなし。苦痛如何に、大なるも、事情如何に、已むなきも、よく、冷静に、よく、忍耐して、死生の道を誤らざるは、勇者にして、又た、智者なり。故に、古の賢者は曰へり、死は易くして、生は難し」と。死生の道、慎しまざるべけんや。

第八節 修飾

修飾は女子の一天職なり

修飾上考ふべきこと

女子にして修飾を顧みざるは、女らしからぬこと、既に、之れを云へり。頭髮言語容儀衣服住居等、之れを美化するは、其の一天職と云ふべし。

然れども、修飾の法は、決して、容易ならず。よく、修飾の目的を達せんと欲せば、第一、趣味といふことを忘るべからず。趣味なき修飾は、謂はゆる、凡俗にして、唯だ、其の人の品格の低きを示すに過ぎず。趣味あればとて、また、適宜を失ふはよろしからず。適宜を失ふは、其の人の心得なきをあらはすなり。適宜とは、修飾をして、其の人其の時其の場合に相應せ

しむることをいふ。今、其の二三の例をあぐれば、先づ、修飾は己れの才徳と相應せしむべし。才徳は本にして重く、修飾は末にして輕し。才徳修養の本を忘れて、外形修飾の末に走るは、浮薄の謗を免れがたし。又た、修飾は身分と相應せしむべし。身分低きもの、徒らに、富貴なるものの外形を摸倣するは、單に、不經濟なるのみならず、又た、甚だ、醜し。更に、修飾は、其の場合場合と相應せざるべからず。都會の流行を、直ちに、田舎に移し、學生の風儀を、其の儘、家庭に施し、或は、習慣に反して、みだりに、新奇なる修飾

修飾本來の  
目的

を行ふが如きは、輕卒の至なり。  
上品にして適宜を得たる修飾は、細かき注意を要すること此の如しと雖も、もと、修飾は、主として、他人を敬愛するより起るものなれば、よく、此の本旨を忘れざる時は、過なきにちかかるべし。

第九節 修飾上の心得

前節の本義に照らし、方今、女子の修飾につきて、望まじき一二の心得を述べん。第一には、之れに要する時間を節約すべし。女子の嗜オモシロなりとて、他の重大なる用向を妨ぐるは宜しからず。成るべく、手早く

修飾上時間  
の節約

する習慣を養ふべし。此のこと、小事に似たりと雖も、實は然らず。世には、若き間は、大いに、修飾に意を凝らしながら、家を成し、兒女を擧ぐるに及びては、忽ち、之れを怠るものあり。是れ、種種、已み難き事情あらんも、一つには、其の修飾に、餘り、手間取り過ぐる習慣あるによるなるべし。一事は萬事にて、斯くの如き女子を主婦とせる家庭の面白からざるは、云ふ迄もなかるべし。

次には、金錢を節約すべし。高尚なる修飾は、必ずしも、多額の金錢を要せず。然るに、世間、輒もすれば、多

修飾上金錢の節約

くの金錢を拂ひて、却つて、卑俗の名を買ふ者あり、まことに、理なきことなり。

修飾には、流行あり。流行は、世間の趣味の變化より來たる。世間を敬ふ點より云へば、流行には、成るべく、從ふをよしとす。之れに從はざるは、頑固に近く、不愛嬌に陥るべし。然れども、流行には、眞に、高尚なるあり、或は、卑俗なるあり。之れに盲從するは、自己の無趣味、不見識を表白す。特に、近來、良家の子女にして、往往、賤業婦の風を學ぶものあり、最も、卑しむべし。されば、追ふべく、又た、追ふべからざるは、流行

流行は追ふべく又た追ふべからず

なり。

俗の俗なる者

何れにせよ、流行は、寸時を急ぎ、大金を吝まずして、相競ふべきものにあらず、敢て、之れを爲すは、謂はゆる、俗の俗なる者と云ふべし。

第四章 富

第十節 富の意義

修飾と富との關係

『修飾は女子の生命なり』とは、往往に、聞く所なるが、是れ、男子に比すれば、女子に固有なりと云ふのみ。女子の幸福に取り、更に、重大なるもの、なほ、少なからず、富も其の一なり。

富は重要な

富は凡べて社會の力を待ちて成る

或る大政治家が、人生最大必要の物を論じて、『第一にも金、第二にも金、第三にも金』となししは、餘りに、物質に偏したる見解なり。然れども、富は、我れ等生存の根源なるのみならず、又た、社會國家の諸機關を運轉せしむる一大原動力なり。故に、富の意義を知り、富の使用法に熟するにあらざれば、決して、世に立つこと能はざるなり。

富の意義を知らんとせば、先づ、其の成り立ちを考ふべし。大凡、世の中の事物は、我が獨力を以て成れるものなし。即ち、或る物を生産せんには、我が資本

努力の外に、君主政府は勿論政治家學者教育家、及び、其の他、諸般の人人の、直接間接の協力を要するなり。なほ、細かに、觀察すれば、各人心身の全部は、すべて、祖宗以來の恩澤と、人間相互の助力とによりて成れるものなることを知るべし。何ぞ、我が獨力を以て、我が富を作れりと云ふを得んや。故に、富には公寶の性質あり。

第十一節 奢侈と吝嗇と

奢侈と吝嗇との解

富を浪費するを奢侈といひ、有益なることにも使用せざるを吝嗇といふ。

吝嗇は卑しむべし

富は使用せらるべきものなり、故に、正しき目的にも使用することを吝むものは、守錢奴なり。守錢奴は、世の公益を謀らざるのみならず、多くは、自己の健康體面をも顧みず、家族親友隣人の情誼をも解せず、美術にも、學問にも、何等の興味を覺えざるものなり。人の嘲り惡むも無理ならずと云ふべし。唯だ、其の浪費せずして、貯へおく一點は、聊か、恕すべき所あり。故に、もし、一旦、過を改むるか、或は、善良なる子孫が、之れを利用することあらば、其の功、頗る、大なるものあるなり。然れども、此の如き場合は、其



の例、極めて、少なく、種種なる丹誠の結果も、多くは、  
烟の如く消え去るを常とす。

奢侈は斥くべし

奢侈は金錢の融通をよくし、或は、時に、慈善の行に類することありて、往往、俗人の好評を博すと雖も、其の、人を誤るや、吝嗇よりも甚だし。元來、奢侈は、人をして、無氣力浮薄ならしめ、遂には、知らず、識らず、罪惡の門に踏み入らしむるのみならず、社會に不生産者を増して、有用なる資本を失ふ等、諸種の害惡を生ぜしむ。自ら、富を作るものにありても、なほ、然り、況んや、他人の勤勞に頼る青年に於いてをや。

### 第十二節 節儉貯蓄

節儉貯蓄の解

節儉貯蓄は我が國に大切なり

奢侈に流れず、吝嗇に陥らずして、金錢貯蓄の適宜を得るを節儉と云ふ。

邦人は、古來、激しき世界の生存競争に慣れず。随つて、他の強國に比して、富の度の、甚だ、低きにも關はず、節儉貯蓄の風、未だ、盛んならず。然れども、現時代の如く、富の勢力の大なることに思ひ到らば、何時までか、其の必要を感じずして、居らるべきや。凡そ、國と家とを問はず、富は、唯だ、節儉貯蓄によりてのみ増し得べきものなり。故に、平素、よく、入るを量

りて出づるを制することは、極めて肝要なり。人、よく、節儉貯蓄の道を守らんか、一日、一事の積む所は、僅少なれども、一年、一國の量は、驚くべき額に上るべきなり。試みに、數字を以て計算せよ、蓋し、思半ばに過ぎん。

節儉貯蓄は  
青年特に女  
子に大切な  
り

青年に於ける節儉の意義は、主として、品性修養の上にある。其の費消し、又たは節約する額は、大ならずと雖も、我が獨立の爲、或は、博愛、正義の爲、劣等にして、不必要なる私慾を抑ふる習慣を養ふは、極めて、重大となす。月に一二圓と謂ふ勿れ、是れ、他日、千

吝嗇は卑し  
むべし

富は使用せらるべきものなり、故に、正しき目的にも使用することを吝むものは、守銭奴なり。守銭奴は、世の公益を謀らざるのみならず、多くは、自己の健康體面をも顧みず、家族親友隣人の情誼をも解せず、美術にも、學問にも、何等の興味を覺えざるものなり。人の嘲り惡むも無理ならずと云ふべし。唯だ、其の浪費せずして、貯へおく一點は、聊か、恕すべき所あり。故に、もし、一旦、過を改むるか、或は、善良なる子孫が、之れを利用することあらば、其の功、頗る、大なるものあるなり。然れども、此の如き場合は、其

の例極めて、少なく、種種なる丹誠の結果も、多くは、烟の如く消え去るを常とす。

奢侈は斥くべし

奢侈は金錢の融通をよくし、或は時に、慈善の行に類することありて、往往、俗人の好評を博すと雖も、其の、人を誤るや、吝嗇よりも甚だし。元來、奢侈は、人をして、無氣力、浮薄ならしめ、遂には、知らず、識らず、罪惡の門に踏み入らしむるのみならず、社會に不生産者を増して、有用なる資本を失ふ等、諸種の害惡を生ぜしむ。自ら、富を作るものにありても、なほ、然り、況んや、他人の勤勞に頼る青年に於いてをや。

### 第十二節 節儉貯蓄

節儉貯蓄の解

節儉貯蓄は我が國に大切なり

奢侈に流れず、吝嗇に陥らずして、金錢貯蓄の適宜を得るを節儉と云ふ。

邦人は、古來、激しき世界の生存競争に慣れず。随つて、他の強國に比して、富の度の、甚だ、低きにも關はず、節儉貯蓄の風、未だ、盛んならず。然れども、現代の如く、富の勢力の大なることに思ひ到らば、何時までか、其の必要を感じずして、居らるべきや。凡そ、國と家とを問はず、富は、唯だ、節儉貯蓄によりてのみ増し得べきものなり。故に、平素、よく、入るを量

りて出づるを制すること、極めて肝要なり。人よく、節儉貯蓄の道を守らんか、一日、一事の積む所は、僅少なれども、一年、一國の量は、驚くべき額に上るべきなり。試みに、數字を以て計算せよ、蓋し、思半ばに過ぎん。

節儉貯蓄は  
青年特に女  
子に大切な  
り

青年に於ける節儉の意義は、主として、品性修養の上にある。其の費消し、又たは、節約する額は、大ならずと雖も、我が獨立の爲、或は、博愛正義の爲、劣等にして、不必要なる私慾を抑ふる習慣を養ふは、極めて、重大となす。月に一二圓と謂ふ勿れ、是れ、他日、千

萬圓を得る基となるものなればなり。豈に、雷だに、一二圓のみならんや。鹽の一握も、燐寸の一本も、糸屑小切、其の他、一切の廢物も、之れを保存すれば、必ず、他日の利用に供し得べきは、勿論、其の精神上に及ぼす効果の大なるは、想像の外にあり。而して、是れ、亦た、女らしき徳の一なりとす。

第十三節 善散授受貸借

富を貯蓄するは、善く、之れを散ぜんが爲なり。二宮尊徳曰く、「富者は、己れを儉して、以て、餘財を推し、貧者は、己れを勤めて、以て、其の恩に報ゆべし」と。推す

富者は富を  
善く散すべ  
し

とは、用立つることにて、富者は分に應じて、善散すべきを云へるなり。富の公寶たるを知るものは、容易に、此の理を悟ることを得べし。されば、學理の研究、新發明、慈善、公益等、文明人道を助くる事業に、其の餘財を散ずるは、富者當然の本務なりといふべし。

富の授受貸借は慎しむべし

されど、故なくして、他人より財を得んとするは、固より、不可なり。是れ、ただに、獨立の氣象を害するのみならず、又た、實に、獨立を危くす。決して、爲すべからざるなり。獨立の人が、獨立の人に對して、相互の

利益の爲、金錢貸借の契約を爲すは可し。是れ、恩怨の生ずる恐少なければなり。情實を以て貸借するは、親友の間柄と雖も、惡し。蓋し、情實に頼りて借れば、返濟滞りて、或は、催促に遇ひ、情實に絆されて貸せば、或は、約束通り返濟を受くる能はず。かくて、催促に遇ふ者は、多く、怨を構へ、返濟を受けざる者は、大抵、憤を含む。貸借の爲に友誼を破るは、誠に、愚の至りなり。是の故に、親しき間柄ならば、其の名は、如何にもあれ、寧ろ、惠與して、之れを忘るるに如かず。其の故他なし。親しき間柄に於いては、彼れ此れの

別、殆んど、無く、彼れに授くるは、亦た、我が受くる所  
以なればなり。

廉潔と謝恩

されど、受くるものより云へば、其の趣、全く、異なり。  
たとひ、親しき間柄なりとも、金錢ば、妄りに、受くべ  
きにあらず、之れを廉潔と云ふ。故なく、他人に金錢  
を請はざるは、言ふを待たず、親しき人の好意によ  
りて、時に、貸與せらるることあらば、深く、其の恩義  
を思ひ、厚く、酬ゆる所なかるべからず。謝恩を知ら  
ざる者は、遂に、人に疎まれ、又た、自己の品性を下劣  
にするものなり。

第十四節 富と幸福と

富に二面あり

富者は幸福にして、貧者は不幸福なること、云ふを  
待たずと雖も、其の幸福不幸福は、思ひしよりも、大  
ならず。是れ、富者には、愉快なる表あるとともに、又  
た、多く、不愉快なる裏あればなり。

富の暗黒面

富者の中には、其の心、常に、飽くことを知らざるも  
のあり。此の輩は、既に得たる所のものをば、少しも  
失はざらんと欲し、未だ得ざる所のものをば、盡く  
得んと願ひて、日も、亦た、足らず。隨ひて、火難盜難、其  
の他の災厄に對する心配、極めて、深く、廣き世界の

中、長き一生の間絶えて、安心満足の樂地を見出さず。されば、亦た、是れ、一種の貧者たるを免れず。又た、富者の中には、山の如き財も、之れを利用すること、を知らず、或は、利用する力なく、終日、一事をも爲さずして、唯だ、下等の慾に耽るものあり。此の輩は、心身、却つて、安樂を覺えず、遂には、自ら、苦勞心配を作るに至る。是れ、豈に、食傷者に似たらずや。富者の生涯も、此の如きは、寧ろ、憫むべきなり。

富を以て買ふこと能はざるものあり

富の力は、極めて、大なりと雖も、名譽、天才、品性、其の他、家庭の和樂等に、至つては、全世界の富を以てす

り

賢き富者は幸福なり

るも、亦た、之れを如何ともすること能はず。富は、決して、萬能に非ざるなり。

富は、何人も、或る度合迄は、之れを要す。然れども、之れに執著するは、愚かなり。富は、之れを所有すべし、決して、之に所有せらるべからず。富を得ては、漫りに、驕り、之れを失ひては、忽ち、失望し、時に、精神を錯亂せしむるが如きは、皆、富に所有せらるるの徒なり。されば、自ら、富を作り、富を所有して、之れを善用する才能あるものは、賢者なり。賢者にして、始めて、富を樂しむを得。

富と正業との關係

第十五節 女子の業務

正しく、富を作り、善く、之れを使用せんと欲せば、正業を勉強すべし。正業を勉強すれば、其の報として、富を得るは勿論、許多の善美なる才徳氣質を生ずるなり。

正業なき者は乞食竊盜の如し

正業の勉強は、嘗だに、自己の爲に利益あるのみならず、又た、社會に對する大なる本務なり。正業なくして徒食するものは、社會の寄生蟲にして、西洋の學者は、道徳上、之れを、竊盜、或は、乞食に同じと論ぜり。言過激なりと雖も、理は、方に、然り。

良妻賢母

妻となり、母となりて、家を治むることが、女子の天性に適するは、古今東西、渝ることなし。而して、善く、家を治めんには、高尚にして、緻密なる注意、勉強を要すること、是れ、亦た、甚だ、明かなり。之れを、輕んずる社會は、野蠻にして、之れを、重んぜざる女子は、其の天職を、自覺せざるものなり。

現代女子の職業

家を治むることの外、如何なる職業が女子に適せりや。世の風俗習慣にて、既に、其の大體は、定まれり。風俗習慣に従はば、多く、過なしと雖も、世の進歩に伴ひ、其の種類、次第に、變り行く傾あり。されば、女子



たるもの、苟も、輕卒の振舞なく、よく、長者の忠告指導をうけて、其の身の方向を誤らざるやう、心懸くべきなり。

第五章 名譽

第十六節 名譽

富と名譽

名譽は重んずべし

富は大切なれども、名譽の、一層、高尚なるに及ばず。人の此の世に在るや、一日も、他人の意向を度外視すること能はず。我が爲す所、滿天下の容るる所とならず、或は、笑はれ、或は、憎まれ、或は、怨まれたらんに、世にあるの甲斐、殆んど、なかるべし。之れに反

破廉恥は諸悪の本

して、我が爲す所、一、他人の認むる所となり、賞讃を博したらんには、其の満足や如何ならん。見よ、名譽の爲とならば、水火の中をも辭せざるものあるにあらずや。人の生命には限あり、百萬の富も盡くる時あり。されど、芳ばしき名譽に至りては、萬世、消ゆることなきなり。名譽、豈に、重んぜざるべけんや。名譽の何たるを知らず、又た、名譽を得んとする心なく、平然として、不面目の行を敢てするを破廉恥といふ。而して、破廉恥は、諸罪惡の基となるなり。されば、人名譽を求むべし。唯だ、其の令名ならんこと

を要するのみ。

第十七節 令名心

名譽心の正不正

名譽心には、正しき名譽心と、正しからざる名譽心とあり。我が實價に相當せる名譽を、正しき方便によりて得んとするは、正しき名譽心にして、之れを令名心といふ。我が實價以上の名譽を、不正の手段によりて得んとするは、正しからざる名譽心にして、其の中、又た種類多し。

虚榮心と功名心とは共に令名心に

實質の如何を顧みず、唯だ、外觀を飾りて、一時の賞讃を博せんとするは、即ち、虚榮心にして、女子の陥

非ず

り易き通弊なり。手段の正邪善惡を問はず、切に、功名を貪り、凡俗に誇らんとするは、即ち、功名心にして、男子の陥り易き通弊なり。一は、他人の目を欺きて、名譽を取らんとするものにして、之れを名譽の竊盜ともいひつべく、一は、名譽を望むこと急なるがため、その手段の善惡をも擇ぶに暇あらざるものにして、之れを名譽の餓鬼とも稱しつべし。而して、二者、何れも、令名心にあらざるや明かなり。

令名心ある人の心事

令名心あるものは、之れと異なり。先づ、實力を内に充たして、後、外觀に注意し、正しき手段に由るにあ

らざれば、必ずしも、功名を願はず、隨つて、腹藏なき  
直言は、喜んで、之れを聽き、心にもなき阿諛は、拒ん  
で、之れを受けず、唯だ、己れの實價に相當せる名譽  
を得て満足せんとす。故に、其の心事、常に、公明正大  
にして、一點の私なし。

第十八節 自重と恭敬と

令名心の二  
側面

令名心には、自重心と恭敬心との兩側面あり。自ら  
名譽を取る側面よりいへば、即ち、自重心にして、他  
人に名譽を與ふる側面よりいへば、即ち、恭敬心な  
り。

自重心恭敬  
心

自重心、及び、恭敬心は、正しく、人の價値を計るに足  
るべき尺度、即ち、鑑識眼を己れに有するによりて  
生ず。己れの價値、よく、此の尺度に合はんには、敢て、  
漫りに、卑下せず、他人をして、相當に、之れを認めし  
めんとす。之れに反して、苟も、其の尺度に合はざる  
ときは、他人は、之れを知らず、又た、責むることなく  
とも、自ら責め、獨りを慎しみて、飽くまで、人たるの  
品位を保たんことを期す。是れ、即ち、自重なり。又た、  
他人の價値、此の尺度に合ふときは、快く、之れを認  
め、相當の名譽を與ふるに吝ならず。隨つて、富貴の

自他の眞價を知るに就いての注意

中にも、偽善者を見ては、之れに屈從せず。貧賤の中にも、功勞者を見ては、之れを敬愛す。是れ、即ち、恭敬なり。自重の點より見れば、其の人は、嚴格にして犯すべからず。恭敬の點より見れば、溫和にして親むべし。溫にして勵に、威ありて猛からずとは、之れを云ふなり。  
人、誰れか、自ら知り人を知れりと信ぜざらんや。されど、眞に、能く、人を知り自ら知るは、自重恭敬の徳を備へたるものにして、始めて、能くすべきなり。人、豈に、自ら省み、自ら慎しまざるべけんや。

令名心を養はんと欲せば不正の名譽心を抑へて一意我が本分を勉むべし

### 第十九節 令名心を養ふ方法

人の價值を定むる正しき鑑識眼を得んには、長き間の經驗を要す。されど、虚榮心功名心は、必ず、先づ、之れを去らざるべからず。是れ、此れ等の心は、甚だしく、鑑識眼を暗ますものなればなり。道理より云へば、凡そ、何人も、名譽心ありて不可なるに非ざれども、實際、年少の者は、自ら、極端に傾き、又た、淺薄に流れ易ければ、寧ろ、初めより、名譽に懸念することなく、唯だ、一意、我が正當に爲すべき事の何たるやに注意し、餘念なく、其の事に、勉勵するを宜しとす。

是れ、却つて、正しき鑑識眼を得て、令名心を長ぜしむる所以の道なり。而して、一時の勉勵の後、我れ、既に、幾何の名譽を博し得たりやなど、顧み念ふべからず。是れ、恰かも、園丁が、其の植ゑたる樹木の、根づきしや否やを知らんとして、これを掘り出し見るが如きものにて、ただに、益なきのみならず、却つて、大害を與ふればなり。

世には、往往、己れを知るものなきを嘆ずるものあれども、其の實、世間の批評は、案外、公平にして、才學品性、人に秀づるときは、早晚、人に知られずといふ

眞實は必ず認めらる

ことなし。古歌にも、

『春の夜の、やみはあやなし、梅の花、色こそ見えぬ、香やはかくるる。』

といへるにあらずや。

第二十節 信用

我が眞價、他人に認めらるる時は、茲に、信用を生ず。名譽と信用とは、殆んど、其の性質を同じくす。唯だ、名譽とは、他人が己れの成績を認むることなれども、信用とは、其の成績を生ずる實力あるを認めて、之れを確信することなり。故に、名譽あるものは、必

名譽あるものは信用あり

信用は實力の寫眞なり

ず、信用あり。

信用は、其の人の實力の寫眞なり。故に、之れあるときは、未知の間柄と雖も、直に、其の實力を知り、安心して交際することを得べし。人は、如何に、親しき間柄と雖も、其の一言一行につきて、其の都度、正邪善惡を判別すること能はず。況んや、未知疎遠の人人に於てをや。故に、互に、信用するにあらざれば、交際は成立つことなし。之れに反して、一旦、信用するときは、交際は、圓滿にして、少しも、障りなく、互に、利益を受くること測り知るべからず。

信用に就いての心得

されば、平生、よく、我が實力を養ひ、正しく、之れを他人に知られんことを務め、苟も、疑を招くが如き舉動あるべからず。若し、疑を受けたるが如き形跡あらば、程能く、之れを辯解し、一旦、得たる信用は、決して、失はざらんことを心懸くべし。信用、一たび去らば、之れを回復すること、甚だ、難し。然れども、始より、大なる信用を得るは容易ならず、故に、先づ、日常、些細のことより信用を博し、漸次、他の事に及ぼすべし。小社會に於いて信用を得るときは、大社會の信用は、求めずして、來たるものなり。

第六章 智識才能藝術

第二十一節 智識才能(二)

名譽の比較的價值

身體財産は、人生に取りて、重大なるものなれども、物質的存在なり。名譽は、精神的なれども、尙ほ他人の評價による。智識才能の、一層精神的にして、自力によること多きに如かず。且つ、他人の評價は、時に、其の實に合はざることあり。深く、之れに拘泥すれば、失望落膽することあるべし。特に、俗人は、輕輕しく賞め、輕輕しく貶す。之れによりて、一一、喜怒するは、餘りに、愚かなり。故に、孔子は、「惟り、仁者、能く、人を

好し、能く、人を惡む」と教へたり。心すべきは、獨り、賢者の是非のみ。

智識才能は富名譽よりも貴し

天才は望ましきものなれども、殆んど恃むに足らず。世の諺に、「十で神童、十五で才子、二十過ぐれば、徒の人」と云へるが如く、人、唯だ、其の天才を恃みて、勉強の功を積まざれば、忽にして、凡庸と化すること、古來、其の例甚だ、多し。之れに反して、勤勉學習怠らざれば、たとひ、其の天性は俊秀ならざるも、智識才能益進みて富貴功名に誇るものの、曾て、味ふこと能はざる高尙なる樂を享くるを得べし。伊藤仁

齊曰く、民を生じて以來、種種の功名富貴ありしは、其の幾許といふことを知らざれども、今より之れを見れば、皆花の如く謝き、水の如く流れ、烟の如く霏び、雲の如く散りたり。冷看に附すべきなり」と、智能を有する人には、斯くの如き意氣と樂とあることを忘るべからず。

第二十二節 智識才能(二)

智識は、實物の觀察、學校の教授、或は讀書等によりて得らるべく、才能は、智識を實地に應用するによりて鍛練せらる。故に、此の二つのものは、相倚り相

智識と才能との關係

女子に必要な  
なるは健全  
なる常識な  
り

煩勞に耐へ  
て實際の難  
事を處理す  
べし

助けて發達するものなり。

社會が女子に望む所の智識は、概して、淺くとも博きにあり、精しからずとも實用的なるにあり。約言すれば、健全なる常識を得るにあり。是れ、其の天職より出で來たる自然の結果なり。但し、特別なる女子が、高等なる學術を修むるは、固より、不可なし。才能と伴はざる學問は、死學問にして、害ありて益なし。有用の智識は、教場、讀書室に於いてよりも、却つて、實地の人事界と自然界とより、得ること多し。よく、注意して、日常實地の事務を處理するに慣る



れば、智識と、共に、才能自ら、養はる。世の女學生たるもの、教授讀書によりて、健全なる常識を養ふと同時、亦た、つとめて、煩勞に耐へて、雜事を處理することを怠るべからず。貝原益軒曰く、耐煩二字、最妙、能耐煩、天下何事不可做、此の言は、子弟の輩、宜しく、服膺すべし」と、誠に、適切なる教といふべし。

第二十三節 藝術

才能は、多く、智識の應用に關し、藝術は、主として、手指の熟練に關す。藝術に二種あり。娛樂の爲にするは、美術にして、實用の爲にするは、工藝なり。而して、

美術と工藝

先づ實用的  
藝術を習ふ  
べし

兩つながら、最も、女子の天性に適せるものと稱せらる。

然れども、實用は根の如く、娛樂は花の如し。先づ、根を養ひて、次に、花を開かしむる用意をなすべし。實用を先とするは一家の經濟を利するのみならず、穩健著實なる心を養ひて、實務の才能品性を成すに大功あるものなり。假令、富貴の家に生れたりとも、實務を料理する能はざるものは、人としての資格十分ならずと云ふべし。

女子普通の手藝を疎にせざる以上は、更に、進んで、

美術に就い

ての心得

自ら樂しみ、又た、人を樂しましむべき美術を習ふは、望ましきことなり。されど、徒らに、流俗に随つて、卑猥なる遊藝を習ひ、或は、虚飾の爲、己れの資質にも適せざる文學、美術を試むるが如きは、無益なり。もし、之れを試むる資質なくば、唯だ、文學、美術の妙味を解する趣味を養ふべし。美を作成するは、凡べての人に望み得べきに非ざるも、美を樂しむは、何人も能くすべければなり。少しも、風流韻事を解せざる人は、玉の杯底なきが如し。察せざるべからず。

第二十四節 趣味

趣味ある者は天地人生を美化す

趣味ある人の目より見れば、天地萬物、凡べて、是れ、美ならざるはなし。故に、日月星辰、山川草木、禽獸蟲魚より、日常の起臥、飲食、交際、會話、其の他、吉凶、死生、平和、戰鬥等に至るまで、盡く、凡俗と異なる趣を感じ得るなり。かくて、人の寂寞に堪へざる所にも、我れには、懐しき友あり。人の悲哀に沈む所にも、我れには、愉快なる望あり。人の煩勞に苦しむ所にも、我れには、靜穩なる閑日月あり。

蓮月尼の歌に

『宿かさぬ、人のつらさを、なさけにて、朧月夜の、花

の下ぶし。』

とあり。又た、松平樂翁の壁書に

『悪くとも、ゆるすべきは、花の風月の雲、うちつけに争ふ人は、ゆるすのみかは。』

とあり。趣味あるものの觀察覺悟が、如何に、俗人と異にして、同じ天地に、別世界の樂あるかを思ふべし。

### 第七章 情操品性信仰

#### 第二十五節 情操

趣味情操等

身體財産は宅地の如く、名譽は墻塀の如し。智識才

の人生に於ける價值

能藝術を客室とすれば、情操品性は堂奥に譬ふべし。而して、其の間、自ら、輕重本末の差あり。

養情養氣の必要

『天地は、譬へば、鏡の如し。人笑へば、鏡も、亦た、笑ひ、人嘖めば、鏡も、亦た、嘖む。我れに快活和平の情操あれば、不幸艱難病氣等の苦も、自ら、消え去るものなり。されば、喜怒哀樂の諸情も、亦た、之れを取扱ふ法を知らざるべからず。之れを情を養ひ、又た、氣を養ふといふ。』

和平快活なる情操を養ふべし

情は、もと、自然に發するものなり。然れども、平日の注意如何により、強烈なるは平穩に、陰鬱なるは快

活になし得ざるにあらず。其の法他なし、己れの意志を以て、善き習慣を情に與ふるにあり。かくして、情が習慣を得たるときは、之れを情操と稱す。凡そ、人の情操は、「一團の和氣春風の中に坐する」が如くならんことを要す。

中正ならざる情を抑へよ

恐羨怒憎勝氣等、必ずしも、無用の情にあらざれども、多くは、強烈に走り易し。是れ、事をなし、人に交はり、生を保ち、徳を養ふ上に大害あり。よく、道理の示す所に従つて、情を制し、中正を得しむべし。之れを克己の工夫といふ。克己は、青年修養の第一秘訣なり。

克己の解

り。

第二十六節 克己

克己は高尚なる勇氣なり。是れ、我が意志を以て、我が不正の情を制するなり。人が眞の人となり得るは、主として、之れに由る。父母が幼兒を教育するや、賞罰の法を設けて、忍耐することを教ふ。もし、之れを教へざれば、其の兒女は、無氣力にして放縱となり、長じて、遂に、天を怨み、人を怨み、親をも怨むに至る。父母の嚴なるは兒女の幸福なりとは、之れを云ふなり。然れども、人、十四五歳に達すれば、意志、稍や、

發達す。父母他人の力を待たずして、自ら、克己せざるべからず。

克己の有無は人生の幸不幸を生ず

人誰れか不足なからん、又た、誰れか苦勞なからん。天地、無情と言はば、則ち、無情なり、人生の行路、難しと言はば、則ち、難し。故に、勇氣なきものより見れば、此の世は、實に、恐るべく、厭ふべし。されど、勇氣あるものより云へば、不足、苦勞は、偶、向上の勇氣を鼓舞する刺激に外ならず。故に、熊澤蕃山は、「うきことの、なほ此の上に、つもれかし、限ある身の、力ためさん。」と歌ひ、張子は、「艱難汝を玉と成す」といへり。克己は、

實に、幸福の基なり。

第二十七節 自足

克己は立志と自足とより成る

克己は二つの工夫より成る。立志と自足と是れなり。立志とは、我が爲し得る正しき目的を定むるを云ふ。天晴の善人たらんと、固く、決心するが如し。自足とは、諸種の情慾の爲に、我が志を害せられざるやう、空望を斷念するを云ふ。心を養ふは寡慾より善きはなし」といふは、是れなり。

自足の功

我が欲することは多し。然れども、梅が香を、櫻の花、柳の枝になどとは、思ふまじきことなり。花の紅、柳

自足の眞意  
義

の縁、心をわけて樂しむべし。故に、「心貧しきものは福なり」とも云ひ、又た「足るを知るものは富む」とも云へり。畢竟、慾多きものは、空望に誤られて、心常に定まらず、随つて、幸福なること能はず。之れに反して、我が志を害する一切の慾を斷つ時は、心、自ら靜かにして、志遂げ、事成るの樂を享け得べきなり。されば、自足とは、向上進取を忌むをいふに非ず。却つて、大いに爲す所あらんとして、不急無益なる諸慾を棄て、一毫も愛惜の念なきを云ふなり。故に、志立たざれば、又た、よく、自足すること能はず。

第二十八節 立志

志の確立し  
難き理由

志は、容易に、立て難し。是れ、我が爲さんと欲すること多く、又た、爲し得べきこと少からざればなり。年少者の志、輒もすれば、動搖して定まらざるも、故なきにあらざると云ふべし。

大體の志は  
早くより定  
めざるべか  
らず

然れども、惡を棄てて善に與みし、愚を去りて賢に就くが如き、大體の志は、早くより確定して、少しも惑ふところあるべからず。此の志を立つること、一日早ければ、一日の益あり。一時後るれば、一時の損あり。王陽明曰く、「大抵、吾人が學を爲す緊要の大頭

よく女子の  
天職を盡さ  
んとするは  
小志に非ず

脳は、只だ、是れ、立志のみ」と、實に、然り。

志の委細は、豫め、此所に論ずるを得ず。然れども、一事の、特に、女子に告ぐべきあり。他に、あらず、女子の天職は、普通思ふよりも、重大なること、即ち、是れなり。心なき人は、大目的とは、唯だ、廣き場所多くの人に關することとのみ思へども、是れ、誤の甚だしきものなり。狭く、小さきものの中にも、大なるものなきに非ず。大て、ふ性質は、事に存せずして、人にあり。大人は、小事を大にす。近世、女子が、其の天職を自覺してより、小さき家庭の奥に安坐して、却つて、天下

品性の解及  
び其の修養  
法

の廣きに奔走するものよりも、其の功高く、其の業美はしきもの、漸く、多きに至れり。小、決して、小ならず、大、必ずしも、大ならざるの理、知るべきなり。

### 第二十九節 品性

人、もし、一たび、善事を知りて、之れを行はば、一步、善行を容易ならしむ。二たび、三たび、勉めて息まざれば、遂に、善良なる精神的習慣を得るに至る。前數章に舉げたる諸心得を知り、強き意志を以て之れを實行せば、我が心は、總べて、善良なる習慣を以て充たさるるに至るべし。之れを、よく、品性を修養し得

品性は最貴  
の珍寶なり

たりといふ。行爲を蒔け、されば、習慣を穫ん。習慣を蒔け、されば、品性を穫ん。品性を蒔け、されば、汝の好運を穫ん」とは、誠に、味ある言なり。

凡そ、人の所有品の中、其の貴きこと品性に若くもなし。されど、品性は無形にして、最も、人心の奥底に存す。故に、人或は、之れを輕視し、却つて、有形の富皮相の名譽等を重んずるものなきに非ず。是れ、思慮の甚だ、淺きによる。眞正の幸福快樂は、品性によりて、始めて、之れを得べく、品性によらざる幸福快樂は、譬へば、浮べる雲の如く、決して、頼となること

品性は不死  
の珍寶なり

なし。豈に、ただに、幸福快樂のみならんや。人の人たる價值は、全く、其の品性にあり。故に、品性ある人の前に立ちては、富者も、權者も、智者も、能者も、殆んど、顔色なし。實に、品性は人間無上の珍寶なり。

完全の品性を得るは、固より、容易の業に非ず。然れども、勉めて息まざれば、企て及ばざるにあらず。品性は、譬へば、日夜怠らず、全生涯を通じて作り上ぐべき美術品の如し。此の美術品たる、一たび成れば、壞れず滅びずして、萬世の珍寶となる。高尚なる品性は、眞に、不死なり。されば、人、男女を問はず、志を立



つるは、必ず、先づ、此所に於いてすべきなり。

第三十節 信仰

品性は安心を得しむ

品性は貴き安心を得しむ。品性なき人は、或は、運命に弄ばれ、或は、私利私情の奴隸となりて、其の樂永續せず、謂はゆる『樂未だ既きずして、憂之れに繼ぐ』といふもの是れなり。

獨立自由の人

品性ある人は之れに異なり。富貴に素しては富貴を行ひ、貧賤に素しては貧賤を行ひ、患難に素しては患難を行ひ、入るとして自得せざることなし。是れ、一に、我が品性に頼りて世に立つが爲なり。之れ

信仰迷信と  
道德との關  
係

を獨立自由の人といふ。故に、平生、心廣く體胖なり。天地に神佛ありや否やは、人人の見る所に任すべし。然れども、凡そ、宗教が、道德の旨に協はずして可なりとは考ふべきに非ず。もし、幸福てふものが、我が力によりて、得る能はざるものならば、神佛なりとて、之れを授くることは能はざるべく、又た、もし、現世、地上に於いて、安心し得ざるものならば、未來、天上に於いても、極樂の平和を望み得る道理はあらざるべし。信仰上の相異は、之れあらんも、道德的修養を爲すべきに至りては一なり。唯だ、夫れ、科學

K2301-19

教科 明治女子大學 大日本圖書株式會社

上の眞理に背き、道德上の實行に害ある迷信に至りては、斷じて、之れを斥けざるべからず。

中等 教科 明治女子大學 卷の三終

明治三十九年十二月廿二日印刷

明治三十九年十二月廿五日發行

明治四十年二月五日訂正印刷

明治四十年二月八日再版發行

著作 者

發行 者兼 印刷 者

中等明治女子大學附

定價 卷の二、金貳拾錢  
卷の三、金貳拾五錢  
卷の四、金參拾錢

加藤 弘之  
中島 德藏

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷

大日本圖書株式會社支社

各府縣下特約販賣所

發賣所



